

開かれた書物、墮胎された言語

五十嵐秀彦

●問われているメディア

俳句とインターネットとの関係。それを考えることは、人とメディアとの関係を考えることでもあるだろう。たとえば文字それ自体もメディアのひとつである。そして文字と、コンピュータを使つての電子テキストとは、実は異なるメディアでありながら人はほとんどシームレスにその変化に順応してきた。さらに今ではインターネットもTVと同様に受け入れられつつある。完全に受身のTVに比べ、ネットは双方向という能動性を持つているが、それも順応の速度を早めこそすれ、けつしてブレーキにはなっていないようだ。自分が関わつて何かを動かしているという実感を伴うネットの能動性は、そこに擬現実世界を作り出す傾向がある。そんなネット・メディアで問題となるのは、書き手の姿が現実とのつながりを持つている場合と、そうではない場合、つまり書き手である自分が消失している匿名の場合だ。匿名者同士が相互に関わりあつて動く世界は、どこまで行つても仮想の域を出ない。いかに現実世界めいてはいても、ついにそれは現実とはなれないのだ。このやや極端な事例が、ネットというメディアの根底に常に存在し続けている。今、そうした性質のメディアの中を、電子テキストとしての俳句が拡大しつつある。それが実体の不分明な、アメールのような存在であることは先に述べたとおりだ。だがしかし、変転するメディアは今始まつたことではなからう。はじめは発声文化というメディアであつたものが、文字文化、活字文化と変容し続け、今電子メディアとなりつつあるのにすぎないと考えれば、発声文化以来発展し続けてきた（発展という言葉に抵抗があれば、消滅すること

なく変容し続けてきた）「うた」が、電子メディアの中で消滅するとは考えられない。変容しつつも「うた」は生き続けると確信する。「うた」の不滅を前提として考えるなら、現状は新しい地平への過渡期であると言つてもいいかもしれない。そう考えた時、インターネットというメディアの意味を検討していたはずが、どうもインターネットに逆に私たちが問われているようにも思えてくるのだ。何を問われているのか。それは、これまで私たちにとつて空気のような存在であつた既成のメディアの意味や在り方なのである。

●メディアの「権威」と座について

既成のメディアとは何か。それを俳句に限定して考えると、結社誌、出版社による俳句総合誌、協会等団体機関誌、新聞などの活字媒体と、TV、ラジオ等の放送媒体とがある。特に俳人にとつて一般的なのは活字媒体だ。結社を名乗るからには必ず結社誌を発刊しているはずである。所属俳人はそこに自作俳句を投稿する。しかし投句した句が無条件に掲載されることは一部の例外を除けば無く、主宰や特定選者による選句を経て句は初めて媒体に載ることになる。俳句総合誌であれ、新聞投句欄であれ、自作を活字化するためには必ずと言つていいほど、ある種のハードルがあるものだ。自由に表示できる媒体というのは、ごく限られた小規模なものを除けば従来はなかつたのである。このことが俳人に活字媒体への権威視を植え付けることになつた。皮肉な言い方をすれば、俳人は自分たちの自己顕示欲を正当化してくれるメディアとして活字媒体を自分たちに都合のよい「権威」としてきた。

またその一方で、従来俳人と俳句とを成立させてきたはずの座のありかたはどうか。連衆の心の交流の場、俳句という

言葉の小気味良いキャッチボール、そして一期一会。それが座の基本だろう。しかし、現在の句会や結社が本当に座なのだろうか。明治以降の出版文化発展のめざましさと、高浜虚子が結社組織の中心に結社誌主宰選を据えて以来、俳誌というメディアに活字化されることが多くの俳人の目標と化した。その中で座がどうかすると出版媒体に従属するかのような存在に変わり、それが俳句の近代化、いかえれば文字化でもあったと言えるのかもしれない。そうした既存メディアと俳人との関係が、インターネットの登場によって変化しようとしている。自由ではあるが核が無く、ときには無秩序になつてしまうネット・メディアによつて、人とメディアとの関係の意味が問い直されているのである。

● ネット落書論

さて、ここまで私は「インターネットの功罪」ということをあえて裏返しに論じてみた。しかし、それはネット無罪論を意味するわけではない。私は自分でメール句会を運営し、自分のホームページで俳句や評論を発表しながらも、同時にネットに対してどこかしら胡散臭いものを感じている。その胡散臭さ、あるいはいかかわしさともいべきインターネット特有の体臭はどこから発せられているのだろうか。

今、私たちの周囲を見わたして気がつくことがある。それは、いつのまにか落書の許されない街ばかりになつてしまったということだ。学生運動や労働運動の凋落にあわせるかのように、街から政治的スローガンであれ、卑猥なものであれ、落書そのものが消えていった。いや消されてしまった。平安の時代から、メディアを持つたざるものの弱者のメディアとして落書はあつた。ときに狂歌で権力者・権

威者を批判し笑いものにした民衆の無名の言葉の歴史の中に落書があつたはずだ。言論の自由が保証された現代であっても、一般民衆にとつてメディアは高嶺の花である。活字媒体や放送媒体で、自分の意見や権力者への批判など勝手に表現することなどできない。それに対して、最も簡便・自由なメディア、それが落書であつた。それは都市の雑踏の中の不特定多数の人の目にふれるところ、ビルの壁や公衆便所の壁、ガード下、書けるところならどこでもよかるう。あやしげなビラもまた落書の一種と呼べる。しかし現在、私たちは落書のためのそうしたメディアを奪われてしまった。落書をしたところですぐに消されてしまうに違いない。

だが民衆のものであるこの最も古いメディアは、街ではなく、今度はネットというメディアへと移つていったのではないか。ネットという新しいメディアではあるが、そう考えてみたとき、平安朝の都の辻の落首と同じ機能を引き継いでいるように思えてくる。

この「ネット落書説」とでも言うべきものを考えるとき、どうしても思い出さずにはいられない文章がある。それは寺山修司が一九六九年に『現代詩手帖』に発表した「詩論まで時速一〇〇キロ」である。その第五章「落書学」は次の文で始められていた。

《落書というのは、墮胎された言語ではないだろうか？ それは、誰に祝福されることもなく書物世界における「家なき子」として、ときには永遠に「読まれる」ことなしに消失してしまうかもしれない運命を負っているのである。だが、だからこそ「全体のなかに存在する諸関係の総体」（マラルメ）とまつたく切り離され、事物を命名もしなければ、事物の呼びかけに答えることもしない――まさに擬似

事物として、壁の汚点のようにひっそり
と時をかぞえているのである》

そうして寺山は約八千字のスペースを
使って落書詩論を展開した。それを今、
読み返してみると、ネットというメディ
アの現状ときわめて類似していることに
気付かされる。

更にすこし長くなるが重要な箇所を引
用してみることにしよう。

《「禁じられた詩」の書き手と読者との関
係をささえているのは、あの「この世で一
番狭い部屋」トイレットの空間だけであ
る。少年時代の私は、落書を読むのがた
のしみで公衆便所へ通った。それは、長
じてから深夜映画館に通う心に似ていた。
何か、ことばでは言いつくせないような
欠落が自分の中にあり、それを埋めあわ
せるに足るものをさがして、あてもなく
まわつて歩いていたのである。ジャン・
ジュネは「私の反抗は、信仰への反抗で
はなくて、自分の社会的な立場、屈辱的
な条件への反抗であった。しかし、私の
深い信仰を害うものではなかった」と自
ら擁護しているが、便所の落書もまた多
くの犯罪と同じように、自らの信仰を害
わずに、社会的に解放を求めている立場
——つまり、タブーとされていることを
書きなぐることによって「話させてくれ、
もつと。書かせてくれ、もつと。」と呻吟
する自由への無垢な欲望にあふれていた
のである。勿論、便所の落書は永遠に「閉
じられた書物」としてあるのではなく、
はじめから「開かれた書物」として存在し
ており、ただ詩人だけがその場から消失
してしまったのだ、と言ってもよかった》

この寺山の言葉を引用する無謀さに私
はおびえも感じている。しかし、「この
世で一番狭い部屋」トイレットの空間が、
今の私たちにとって、この世で一番広い
部屋、ネットという空間に置き換えられ

ていること、そして、そこが「開かれた
書物」であり、「話させてくれ、もつと。
書かせてくれ、もつと。」という欲望に
あふれていることに私は気付かざるをえ
ない。ネットというメディアに対して持
つ、ある種のいかにわしさの原因がここ
にあるのではないか。そして便所の落書
にも似たいかがわしさの中に、想像力の
武器が潜んでいるのかもしれない。それ
が天使の武器か、悪魔の武器かは、今の
私にはわからぬのだが、何か新しい闘い
の胎動を感じさせるのである。

●可能性に向かつて

ネットの現在は学問的メディア論の追
いつけぬ速度で疾走している。一瞬たり
とも停止することのない流動体である。
今、ここで私たちが何を語っても全て
後追いとなることだろう。それでも良い
のだ。私たちは長い眠りから揺り起こさ
れようとしているのかもしれないのだか
ら。これまでも存在しながら、しかし裏
面に隠されていたものが一気に噴出して
いる。その現実に向かつて是非を論ずる
愚を思い知らされてもいるのだ。

俳句におけるネットというメディア、
あるいはネット・メディアにおける俳句
への評価を問われると、正直何も言えな
いことに気づく。匿名という闇を背景と
した混沌とした「自由」をどうすれば評
価できるだろう。しかし、ここにこれま
でなかった空間が開けているのは間違
いない。既存のメディアは朽ち果ててい
るわけではないが、しかし一抹の閉塞感
をぬぐえない現状において、この新しい媒
体を性急に評価すべきではなく、将来に
向けての可能性としてとらえたい。

ここまで述べてきたとおり、私はネッ
ト・メディアについて考えるのであれば、
並行して既成のメディアのあり方を議論
すべきと考える。ネットの未熟を非難す

る人がいるとすれば、その人に結社や協会組織や、出版界がこれからどう生きてゆくのかを考えてほしい。メディアが目的なのではなく、文学的状况活性化こそが探し求めるべきものだからだ。新しい才能、新しい思想を、既成のメディアが掘り起こしてゆく作業を今の時代は為しているだろうか。

それは今を生きる俳人ひとりひとりが考えねばならない。仲間ボメや、主宰礼讃や、組織防衛的発想に埋もれていては、俳句という文芸も早晩ただの家元制の習い事と変わらぬものとなってしまうに違いない。「インターネットの功罪」という問いの意味をあらためて考えてみると、今ほど個々の俳人のあり方が問われている時もないのである。

いがらし・ひでひこ

昭和31年生まれ。札幌市在住。「藍生」会員、

「雪華」同人、メール句会「迅雷」世話人。

現代俳句協会員。藍生新人賞、雪華俳句

賞、第23回現代俳句評論賞受賞。